

千寿にまつわる書籍

古来千寿のことを記した本は次のとおりたくさんあります。

本冊子の記事の参考にさせていただいた本を含めて列挙すると次のとおりです。

平安末期	平家物語 源平盛衰記	江戸時代	遠江古蹟図絵 遠江風土記伝 古老物語
鎌倉時代	吾妻鏡 唐糸草紙	平成	磐田市史 磐田ことば第1巻

千寿と磐田の産物

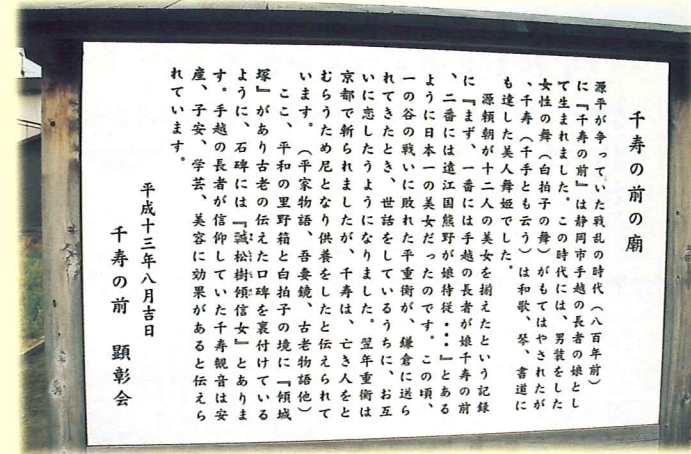
磐田の産物の中に千寿にちなんだお酒があり全国に発送されております。また千寿を偲ばせる和菓子が皆さんに愛されております。

むすび

以上“千寿の前”について述べてきましたとおり、今の静岡市手越で生まれ磐田市長野地区野箱に眠っている一人の薄幸の美女の伝承を、私たち郷土の者は大切にしたいと念願しております。それは墓及びその周辺の保存はもちろん、伝承そのものと、それにまつわる唄、踊り等を郷土の文化と考え、後世に伝えなければならないと思う次第であります。

関係各位の御協力をお願い申し上げて、このさやかな小冊子発行の結びと致します。

平成15年3月吉日
千寿を考える会



発行 千寿を考える会

連絡先 静岡県磐田市草崎1618 (山内武治)
TEL (0538) 32-5987

千寿の前物語

美しく悲しい恋の話
—磐田市野箱に残る—



はじめに

磐田駅から南西へ約3Kmの野箱地内に“千寿の前”の墓があります。又の名を傾城塚(けいせいづか)といいます。

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて生きた1人の美女のロマンに満ちた、そして余りにもはかない生涯を閉じた“千寿の前”の墓があります。

毎年命日の4月25日前後に長野地区「千寿顕彰会」の主催により千寿供養祭が盛大に行われております。

以下“千寿の前”にまつわることがらを記し、千寿の霊を慰めると共に広く世の人々に知っていただく為にこの小冊子を出す次第であります。

※おことわり

“千寿”と“千手”の名前について

本来は“千手観音”にちなんだ女性であることから古来吾妻鏡を始め殆どの文献は“千手”となっております。然し当地方では何時からか“千寿”と呼ぶようになっておりますので敢えて本冊子は“千寿”と記させていただきますのでご理解をお願い致します。

千寿の前物語

“千寿の前”は今から約840年前 現在の静岡市手越の長者の娘として生まれたのであります。

千寿の母は永らく子供に恵まれなかったので、今の磐田市千手堂にある千手寺にまつられている千手観音にお参りして、しばらくして恵まれた子であったといわれています。([遠淡海地誌]「野箱村」より)

千寿は成長するにつれて和歌、琴等も上達し美貌をかわれて源氏の大將源頼朝の館に入ることになりました。当時男装した女性の舞(白拍子の舞)がもてはやされておりましたが、千寿もその名手の1人であったのであります。

頼朝が12人の美女を揃えたという記録に「1番は千寿の前、2番に熊野の娘侍従…」とあるように日本一の美女でありました。

当時、源氏と平家は国内で激しく争っていましたが、一ノ谷の戦いで平家が敗れ大将の一人平重衡が捕らえられ鎌倉まで護送されて来ました。

はからずも千寿がその重衡の世話を命ぜられたのが、千寿の運命を変えてしまったのであります。

頼朝は平重衡の堂々としている態度が気に入り、実に1年2か月も鎌倉にとどまらせていました。

この間に若き平家の公達と千寿の間に恋心がうまれたのは自然の成りゆきだったのかもしれませんが。

しかし重衡は4年前の治承4年(1180)奈良の東大寺・興福寺等の大加藍を炎上させた罪により、奈良の大衆から斬首の強い要請がありました。頼朝はそれに抗し切れず、再び重衡は京都に向かいましたが、奈良近傍の木津川の畔で首を打たれたのであります。享年29歳であったといわれています。

重衡処刑の報に接した千寿は「はからずもお目にかかった方の悲しいおうわさを聞くと胸がつぶれる」と嘆き悲しみ、黒髪をおろして尼になり、白拍子村(今の野箱)に庵をむすび重衡の菩提を弔ったということでもあります。

文治4年(1188)4月25日未明重衡を恋い慕いつつ24歳という余りにも若くして波瀾の人生を終わったのであります。

白拍子と傾城塚

(1) 白拍子

白拍子の起源については諸説がありますが、遠くは中国の有名な美女楊貴妃、王昭君善も白拍子であったといわれています。

日本では佛御前、静御前等も白拍子でありました。

平安末期に起った歌舞のことであり、また舞う女性のことであります。

最初は水干に立烏帽子をかぶり、白鞘巻(刀)を差して舞いましたが、後になって水干袴だけで舞ったといわれています。

水干とは絹製の狩衣のことであり、従って男装で舞ったので男舞ともいいます。

鎌倉時代が一番盛んであったとのこと。

(2) 傾城塚

“まえがき”にもふれた傾城塚の「傾城」とは、美人のことでありますが、美人にうつつをぬかして城を傾ける程入れ込むことからきており、財産を無くす程女に貢ぐことであります。

中泉出身の山下熙庵は「古老物語」の中で「豊田郡池田庄野箱村に白拍子“千寿の前”が墓あり。“千寿の前”は駿手越の長者が娘也。…平重衡の刑死後は尼となり当国に蟄居の故此処を白拍子村と呼ぶ。葬る所の「墓印に松を植え世人傾城の松といへり」と書いてあります。

墓石には「緘松樹傾信女」とあります。



千寿と熊野と朝顔

“千寿の前”と同じころ生をうけた池田の庄(豊田町池田)の長者の娘熊野は平宗盛に見初められ、京都の宗盛の館で暮すうちに、池田に住む母親

が病気になったので宗盛に帰国を懇願します。

熊野御前は帰国を許してくれない宗盛に

“いかにせん都の春も惜しけれど
なれしあずまの花や散るらん”

と歌って帰国を許されたという話は有名ですが、京都に熊野を迎えに行ったのが待女の“朝顔”であったということです。

そして“朝顔”は千寿と熊野との間をとりもつたのであります。

“朝顔”はその後今の磐田市前野で没し、その墓は前野の松尾八王寺神社の東側の「朝顔塚」にひっそりと眠っております。



豊田町誌別編 I 熊野御前より

千寿に関する芸能

(1) 能

古来千寿まつわる芸能が残されております。能楽の中の「千手」であります。平家物語10「千手前」に準拠しており鎌倉の重衡を預っている狩野介宗茂の館の情景であります。

千手(シテ)重衡(ツレ)宗茂(ワキ)で演じられ、死を間近にした重衡の絶望感を引き立てようとする千手が、酒をすすめ琵琶と琴の合奏で盛り上げて舞を舞い、重衡の生命が千寿の愛によって一瞬の輝きを得るといった筋書きで演じられております。

(2) 浪曲

最近静岡市在住の藤浪俊夫先生(千寿供養祭にも度々お見えになる)が制作された浪曲「千手重衡」=一期の恋=と題するものがあります。捕らわれの身となった三位中将重衡と千寿との出会いと東の間の愛を、名調子でうたい上げております。

千寿まつわる郷土芸能

(1) 千寿の詩について

千寿供養祭にあたり「千寿の詩」の舞が奉納されます。この詩は小沢卓郎先生(故人)作詩、川口尋之先生(浜松市在住)作曲でありまして後藤ひとみさん(磐田市中泉)が千寿の前にふんして踊ります。あたかも鎌倉時代にタイムスリップしたような情緒を感じさせるのであります。このような踊りが末永くこの地に踊り継がれることを願わずにはおられません。

(2) 千寿手まり歌について

この歌は昭和45年(1970)高塚忠先生(磐田市見付在住)の作詞、長谷川堅二先生(東京在住)作曲によりましてソノシート版で発表されました。

当初磐田市立南小学校が採り上げ河村豊子先生の指導で児童がうたいました。その後平成6年この歌に地元民謡愛好会が振り付けをして磐田市立長野小学校がこれを取り入れて児童が踊るようになりました。この踊りを通して親子の対話、学校と地域との交流、歴史に対する関心をもつようになる等で、学校地域共にこの歌を郷土芸能として育てていけたらよいと思う次第であります。千寿の手まり歌の一番のみを御紹介致します。

ひとつふたつとまりつけば
千までつかぬに日がくれる
ひとり待つよな松に風
ふけば鳴ります筈の笛
あれ舞いなさる千寿さま 千寿さま



供養祭で踊りを披露する長野小の子供達